

神奈川文芸賞 [2024]

「お名前と年齢を教えてください」
 「おきのりこ(小野野紀子 六十九歳です)」
 「六十九歳? えーっと、真面目に答えてもらえますか」
 「はい、真面目に答えますけど」
 「大丈夫ですか、頭打ってますかね、救急車もさ着きますのでそれまで横になって休んでいてください」
 「救急車? そんな大袈裟な、私は大丈夫です。迷惑をお掛けしました。失礼します」
 「さう言っただけで逃げようとして勤務室から飛び出した。駅員さんと救急隊員の方には申し訳ないと思っただけと本当に何ともないのだから。それと今日の予定が狂ってしまう」

何が思ったのかよく覚えていない。鎌倉駅に着いてホームから階段を下りている時に電車に乗ろうと急いでいたサラリーマンとぶつかってその後が思い出せない。気が付いたら勤務室だった。おそろしく階段から落ちて気を失い勤務室に運ばれたのかもしれない。微かに思い出されるのは、ふわっと身体が軽くなり暗い穴の中に落ちていったような気がする。

今日は妙本寺の海堂を見に鎌倉にやって来た。毎年三月から四月にかけて妙本寺を訪れる。海堂が花弁を散らす中に小林秀雄と中原中也の姿を想像(二)人の会話を夢想するのだ。今の海堂と当時の海堂は別物だが私にとって大した意味はない。そこにおの二人が会話少なに行っていた事実が私を興奮させる。大学の文学部を目指したのは小林秀雄や中原中也の影響が大きい。

まずはいつも通り珈琲を飲んでから。鎌倉にはまだ昔ながらの喫茶店が残っている。行きつけの店も、そろそろ営業しているがマスターもママも高齢なので心配だ。重い木の扉を開けるとカワバルの音と珈琲のいい香りに包まれる。いつもの席に着くとママがゆづり汁を足取りで注文を取りに来る。

「ごりごりごませ」
 「ホットと」
 「この店には四十年近く通っているがマスターもママも余計な話はない。かと言っただけでよそよそしい訳ではなく「今日は寒いね」「お久しぶりね」などと話しかけてくれる。私はブラックで飲むのでミルクピッチャーは付けていない。そんなちよっとして「お待たせしました。ホットです」
 「あれ? ミルクピッチャーが付いている。ママもママも私のことを覚えてるわけがない。ピッチャーはだいたい、歳のせい。今日はゆづり汁もいつものようにいかない。でも珈琲はいつもの味、美味し。そこで文庫本を開く」

高校2年の時、小説家になりたいと思った。もちろんそんな大それたことは親にも友人にも話せなかった。進路は東京の私立大学の文学部をいくつか受験し、第一志望に合格した。

私は富山県海から程近い小さな町で生まれ育つた。父は小さな水産加工会社を経営しており、母は従業員と共に黙々と簿録を作っていた。二人とも働き者だった。私は、この地を一刻も早く離れたい一心で両親を説得し東京の大学に進学した。文学部を出たからと言って皆小説家になれるわけではないことくらい分かってはいたが、公募コンクールに数回入選したことはあるので希望は捨ててはいなかった。しかし、それと小説家になることは別の次元のだと卒業する頃には分かって始めていた。せめて本に関わる仕事に就きたいと図書館司書の資格を取り、大学卒業後は富山には帰らず神奈川県職員に応募し採用され、県立高校の図書室や県立図書館の司書として三十八年間働いてきた。六十歳で定年退職、その後再任用職員として五年働いた。

公務員として長く働いてきたので退職金も十分にもらい、その蓄えもある。一人で生きていくには不自由な生活が送れる。結婚はしたくないわけではなかった。ごりごりかと言つと、子どもの頃は大人になれば結婚はするものだと思っていた。若い頃もいつかは結婚するのだろう、と何となく考えていたが、気が付けば四十歳を過ぎていた。実家の両親も帰省するたびに「まだ結婚せんかね」「はあ、孫の顔見せてくれませ」といふ言ひを言ってきたが、それもこの頃から諦めたか言わなくなっていた。五歳下の弟は地元の商業高校を卒業し父の後を継いだ。子供は三人いて二世帯住宅で両親と暮らしていたので私は安心して自由に生きてきた。本当に親孝行な弟で感謝している。十五年前に父が亡くなり、その二年後に母を追うように母も亡くなった。それ

れまで年に二回は帰省していたが親もいなくなったので二数年は富山に帰っていない。最近、若い頃のことや昔関わった人たちのこと、あの時の選択は正しかったのだろうか、違う道があったのではないかと、両親はあの時どんな気持ちだったのだろう、もし結婚していたらどんな人生になっていたんだろうとか。過去の「だったら」を考えると多くなってきた。

あつという間に一時間たっていた。バッグからスマートフォンを取り出しメールをチェックする。高校時代の同級生からメールが入っていた。今年入ったからクラス会の連絡が来ているが「古希を祝う会」と銘打っている。七十歳がそんなに目出度いか? と言いたい。

『人生七十古来希なり』は昔の話。今や七十歳以上の人口は全体の約二十%を占めている。私もその一人だが、感謝することはあっても何年も何十年も会ったことのない同級生と目出度い目出度いと言つて祝う気にはならない。もちろん、それは昔懐かしい仲間たちと酒を飲み交わしたいと言つて口実に過ぎないことは分かっている。でも私は年寄りが集まってお酒を飲みながら子や孫の話、病気や薬、年金の話、さらには昔話まで過去を振り返りたこととは思わない。

過去を振り返ることが多くなった私が矛盾した考えで同窓会を断るのが何だか可笑しい。老いに対する細やかな抵抗なのかもしれない。ママがゆづり汁と近づいてくる。「お冷はいかがですか?」
 「あ、すみません。長居をしてみました」
 「ううん、いいのよ。ゆづり汁を飲んで。あなた

た、初めてじゃないわね。以前いらしたことがあるでしょ」
 「えっ? は、はい。もちろん」
 「さうよね。ずいぶん前にお目にかかった気がするわ。ゆづり汁を飲んでね」
 「私はかなり動揺していた。二か月前に来たばかりなのに。今年もよろしくね、なんて言っていたのに。どうしたの?」
 「不穏な想像を巡らせながらトイレに立った。鏡の前で立ちすくんだ」
 「えっ、誰?」思わず振り返ったが誰もいない。鏡に映っていたのは紛れもなく二十代の私だった。右耳の下の顎にあるホクロの位置、額の小さな傷跡は小学生の時に鉄棒から落ちて付いた傷だった。老眼鏡を掛けなくても顔の小さな傷まで見える。さう言えば文庫本を読むのにメガネを掛けずにはいられない。昔着た文字もはっきり見えていた。だから駅員が六十九歳と言ったとき「真面目に答えてください」と言っていた。ママさんも四十年も前の私だと気付くはずはない。

駅で人にぶつかって転落した時に何が起きたんだ。小説や漫画ではぶつかった拍子に男女が入れ替わるとか、過去にタイムスリップしてしまうなんてストーリーはよくあるけど若返るなんて聞いたことがない。喫茶店を出ると冷たい空気が身体全体を包みこんだ。妙本寺に行くのを取りやめ、とりあえず今日は横浜郊外の自宅に帰った。シャワーを浴びて自分の姿を見た。(なんてことだ。水滴は若い身体を弾けるように落ちていく。胸、お腹、腰、お尻、張りのある肉体が滑らかな肌

『嘘でしょ! きこちゃん何?』
 「私さきこちゃんと呼ばれている。子供の頃さう呼ばれることもあったが三十五歳以降に「きこさま」とか「きこちゃん」と呼ばれることが多くなった。秋篠紀子さまの影響だ」
 「ゴメン。急に富山に帰ることになった。でもまだ正式に決まったわけじゃないから。もしかすると一晩寝た翌日の姿に戻ってしまうかもしれない。含みのある言い方にした」
 「明日は来るんでしょ?」
 『もう本当に残念、富山に帰る前にご飯食べに行こうね』
 「うん、ありがとーまた連絡するね」
 週に一度の体操教室の仲間が私にとってこんなに大切なものだったか、思い知らされた。一方ではそんなに深刻にならなくても一晩寝た翌日通りになっている、と楽観的に考える自分もいる。

翌朝、五時半にアラームが鳴る。いつも通りの朝が来た。昨日の出来事が夢のようだった。最近では朝すべに起き上がるのに一苦労だが、今日は難なく起き上がる。洗面所に立つ。まじまじと自分の顔を見る。推定年齢十九歳の私が映っている。いつもの通り顔を洗い歯を磨く。珈琲メーカーをセットして、FMラジオを付ける。キッチン、リビングを片付け、洗濯機を回す。いつも通りラジオから流れる音楽と洗濯機の音を聞きながら出来上がった珈琲を飲む。(あーおいしー)

このマンションに住んで二十四年。四十五歳の時に一人で生きていく証として購入した。隣近所のお付き合いは独身で子供もいないので、それほど密ではないが親しい人もいる。だから、ここも出なければならぬだろう。ネットで中古マンション専門の買い取り業者をい

くつか当たってみた。退職金でローンは完済しているから売却したお金で三浦辺りの古民家を買えるといいのだが。六十歳を過ぎたころから三浦半島のどこかに古民家を買って「Libary Cafe」を開きたいという夢が芽生えていた。もうすぐ古希を迎える身としては健康であつてもあと十年ほどしか働けないだろうから、悪くない選択だと思つてはいたが、現実にはなかなか決断出来ないでいた。これはいいタイミングなのかもしれない。

すぐにマンションの売却手続きを進め、とりあえずウイークリマンションに身を寄せた。引っ越しは業者にすべて任せ、家財道具は一人暮らしなので大した物はないが、大量の本はコンテナボックスに一時保管した。思ったよりスムーズに事は運び、後は気に入った古民家を見つけた。それは意外にも早く見つかった。

湘南地区や三浦地区を専門に扱っている不動産屋さんの山本社長は初老の物腰の柔らかい感じのいい人で、熱心に話を聞いてくれた。それなら今、小野野さんにピッタリの物件がありますよ。早速見てみますか?」
 「さう言っただけで山本社長は二軒の物件を案内してくれた。最初の二軒は葉山御用邸から山側に十五分ほど歩いた所であった。見た瞬間にどこか懐かしい感じがして、そこで生活する私の姿が想像できた。木戸をくぐるとごんまりした庭と二間ほどの縁側がある築八十年の一軒家だった。価格も予算内、状態も良かった」

「ここに決めます」
 「え、いいんですか? まだ一軒目ですけど」
 「は、この家の中に私の姿が見える気がするんです」
 「ほつ。長年この仕事をやっていると、小野野さんみたいな人は初めてだ。こんな高い買い物一軒目で、初見、即決なんてなかなか出来ることじゃない」
 「そうですよね。でも何軒見ても私が求めている以上の物件はないと思います」
 「それは良かった。気が変わらないうちに早く契約しましょうか」
 「さう言っただけで山本社長は悪戯っぽく笑った。私は直感的にこの人は信用できる人だと思つた。もしかしたら本当の事を話しても分かってくれるかもしれない。漠然とそんなことを考えていた。事務所に着くと山本社長は少し温められた日本茶を出してくれた。

「美味しい。心の声が思わず漏れた」
 「それは良かった。山本社長は嬉しそうに笑ってお茶を飲みながら「私は大の珈琲党なんです、七十歳を過ぎた頃から日本茶が心底美味いって思う時があるんですよ。不思議ですね」
 山本社長は七十歳を少し過ぎたばかりなら、ほぼ同級生みたいなものだ。二人でお茶をすすりながら、思わず笑ってしまった。

小説部門：準大賞 コキノキコ／二俣吉秀



イラスト/横山莉咲 (県立相模原栄光高校美術部1年)

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。入賞作品は順次掲載します。 次回は12日の予定です。

神奈川文芸賞 [2024]

「何か可笑しかったですか？」
「いえ二人で日本茶すすって美味しいなんて、何だか可笑しくって」

「確かに、茶飲み友達みたいですねえ。」と言いつつ山本社長は必要な書類、住宅ローン関係、登記まで手続きの流れについて流暢に話した。必要書類などが書かれた用紙と住宅ローンのパンフレットを渡された。

一週間後、購入申込書や住民票など揃え山本社長を訪ねた。住民票には生年月日の記載があり年齢はすぐに分かるだろう。いへら若く顔メイクをしたと云って六十九歳に見える訳がない。マンションを売る時のようにはいかない、ここでカフェを開業し生活をするからにはそれなりの関わりが必要になる。これから手続きをし、さらに先のことまで相談する上で隠し通せる自信は全くない。一週間考えに考えた末、山本社長には全手を打ち明けて力になってもらえば、こんなに心強いことはない。でも、こんな話を誰か信じてくれるだろうか。

「お待たせしました。美味しい珈琲が入りましたよ、小木野さん」
「ありがとうございます。私は珈琲を飲みながらテーブルの上に書類を並べ始めた。

社長は雑談を交え、書類に目を通していった。
「ん？」
社長の手が住民票のところで止まった。
「あら、こんな間違いってあるんですかね？ 小木野さん、これ、生年月日のことか」

社長は私の顔をじっと見ている。たまたま、覚悟を決めた。この人に賭けよう。私はナチュラルメイクにカジュアルな服装で来ていた。おそろしく二十代に見えるだろう。黙ってテーブルの上に免許証や保険証、教女の身分の証明になるものを並べさうに用意してきた若い頃から今に至るまでの写真を広げて見せた。社長はポカンとした顔で私を見ている。
「社長、実は大事なお話があります。そう言っ

て、鎌倉駅で起きたこと、この一月のこと、そして、私の出生から現在に至るまでの話を、写真を見せながらまるでプレゼンテーションのように熱く、そして冷静に説明をした。

「うーん。」社長は腕組みをし静かに目を閉じた。私は社長の次の言葉を待っていた。
「まず、小木野さんが私を信頼してお話をしてくださったことに感謝します。でも、『ハイ、分かりました』なんて簡単に信じられないのが本心です。ただ、小木野さんの説明は明確で経歴や写真を見る限り疑いようがない。少し時間をください。混乱しているのを整理したい。明日また連絡します」

翌日、山本社長からメールが届いた。
「私は小木野さんとほぼ同世代の七十二歳、昔は人生五十年、今は人生百年時代になった。真ん中を取って七十五年、私達はすでにそこに差し掛かっている。最大限生きたとしてもあと三十年、逆にいつ死んでもおかしくない年齢だ。しかし小木野さんは五

十年いや七十年と生きることがある。夢のような未来の世界を見ることが出来る。何かを成す可能性に溢れている。だから、純粋に同世代の小木野さんを全力で応援すると決めました。」
「うーん、私の趣味を推定二十九歳の私は新しい人生をリスタートさせることが出来た。店の名前はすでに決まっている。以前カフェを開業したいと思った時期に考えた名前だ。」

Library Café「図書室」
つまり、私の蔵書約二千冊を自由に手に取って読んでもらう、図書室カフェなのだ。
家のリフォームは二千冊近くある本を収納する造り付けのスライド式本棚をメインに、あとは古民家の風合いを残すために極力手を入れずに最低限のリフォームを一月で完成させた。引越しも済ませ、これから本番。八月の開店を目指した。

「社長、ありがとうございます。何かかオープンに漕ぎ着けました」
開店日に駆け付けてくれた山本社長に深々と頭を下げた。
「いやいや、小木野さんの努力と行動力の賜物です。おめでとうございます。そう言って社長は綺麗な花束をプレゼントしてくれた。開店時間まで二人で珈琲を飲んだ。

「社長、お客さん来るかな？」
「大丈夫だよ、フライヤーを近隣にポスティングしたし新聞折り込みもかなり広範囲で入れたからね、それよりお客さんが大勢来たら一人で対応できるの？ もちろん私も手伝うけど、一応、娘には声を掛けておいたから屋頂には来てくれると思うよ」
社長には百恵さんというお嬢さんがいて、横須賀でショットバーを経営していた。

「何か何々すみません。プロの百恵さんの応援は心強いです」
開店十分前になったので、私は準備をし、社長に暖簾と看板を出すのを頼まれた。
「小木野さん、大変、大変、木戸の外に十人ぐらいの人が列を作ってたよ、いや、驚いた」
昼すぎからは百恵さんも加わって何とか初日をクリアした。

「キコちゃん、お疲れ。今週は空けてあるから手伝えるよ。遠慮な言いつてね」
百恵さんは四十歳で娘のような年齢だけど、キコちゃん、キコちゃん、って可愛がってくれる。なんとも不思議な気分だ。山本社長はそんなやり取りをニヤニヤしながら見ている。
最初の週間は百恵さんのお陰で何とか乗り切った。二週目からは、客数は減ったが近所の常連さんも来て一日二十人から三十人位で落ち着いた。

一人でのんびりやるにはちょうど良い人数だった。そんな九月に入ったばかりの火曜日、二十代前半の青年が来店した。日焼けした顔にロンクヘアを後ろに束ね、白いTシャツ、ハーフパンツにビーチサンダル。
「スママセン。いいですか？」と、遠慮がちに、細かい声で店に入ってきた。
「あ、どうぞ、お好きな席に」
彼は縁側に近い席に座り、壁一面の本棚を驚いたように見上げていた。
「いらっしゃいませ」
彼は私の顔を見て何故か安心したような優しい笑みを浮かべた。

「アイスコピーお願いします」
「ドキッ、イケメン。あービックリした」
子供、いや孫のような年齢の青年に不覚にもドキドキしてしまつた。彼は美術関係の本を数冊読んで一時間ほど帰った。会計の時にその繊細な手に青い鉛筆の握りかたが付いているのが見えた。よく見るとTシャツにも所々に鉛筆のシミがあった。きつと絵を描く人なのだろう。近くには県立近代美術館もあるのだから立ち寄る人も多い。
翌週の火曜日、スママセン。いいですか？」とまたあの青年が来店した。

「いらっしゃいませ」
「アイスコピーお願いします。あの、美術書が多いのでとても嬉しいです。毎週末もいいていいですか？」
「ええ、もちろん。どきどきする自分が情けない。あ、あ、絵を描いていらっしゃいますか？」
「僕、マリナーでアルバイトしながら絵を描いているんですけど、美術館に来た時に顔見知りの方にこのカフェの事を教えてもらつたんです。ホントに図書室みたいで、すいてですね」
（嬉しい！そんなにキラキラした目でみないで。そんな心の声を抑えよう。）
「私、図書室司書を長くやっていて、こんなカフェを開くのが夢だったんです」
「長〜、へ〜、凄いですね。本は事なら何でも分かりますよ。いろいろ教えてくださいな」
翌週の火曜日。またあの青年が来店した。

「スママセン。いいですか？」
「いらっしゃいませ。アイスコピーですね」
「はい、彼が嬉しそうに答えた。
この日は色々な本を見ては戻しを繰り返して何か探しているように見えた。
「すみません。教えてもらいたいんですが」
「はい。何かお探ですか？」
「画家のフランシス・ベーコンについて書いてある本ってありますか？」
「えーと、シル・ドゥルーズの『感覚の論理』ならあったと思います。美術書の所じゃなくて哲学書に分類したかも知れないわ、ちょっと待って。私のミスだ。急いで哲学書の中からそれを見つけて彼の手元に置いた。
「すごい、ありがとうございます」
私を見る彼の目がキラキラしている。
彼は帰りの会計の時に、壁に掲示してある【食品衛生責任者 小木野紀子】の表示を見て「ここのきこさん、」と呟いた。
私は思わず吹き出してしまった。

「連つわ、おぎのり。」と言います」
「あ、スママセン。僕の名前はイカワカイと言います。井戸の井に三本川、カイは絵画の絵と書きます」
「素敵な名前ですね」

「ええ、名前に引つ張られて絵が好きになったようなどころもあります。それとイカワカイって回文になっていて上から読んで下から読んでも同じなんです。だから回文みたいな言葉や名前にすぐ反応しちゃって、コキコさんだと回文の名前だなぁって思つて」
「ホントだ、初めて気が付いたわ」
「へ、へ、へ。彼は照れ笑いを浮かべ「これからキコさんと呼んでいいですか」
「もちろん、私もカイ君と呼んでいいかな」
「もちろんです。ヨロシクお願いします」
それから毎週火曜日にカイ君は来店した。

十月に入る頃には私達は旧知の友人のように絵や本について語り、閉店後に私が作った料理で食事をすることもあった。
「僕の夢は、いつか葉山美術館で個展を開くことなんだ。美術大学を出たからと言って誰もが画家として生活出来るなんて思っていないけど、僕は絶対に諦めない。でも一方では僕には才能がないのかも思れないと思うこともある。卒業して三年、大きな公募展には落選続き。だからこんな夢は誰にも言ったことがなかったけど、キコさん、今度、絵を頼ってもらえますか？」
「もちろん。楽しみにしてるわ」
翌週の火曜日、開店と同時に。
「スママセン、いいですか？」カイ君だ。急いで顔を出す「小木野さん。元気？」
山本社長だった。
「な〜んだ、社長。おはようございます」
「な〜んだ、はい、いいですよ。誰か待ってたの？」
「いいえ」
「なに、何怒ってんの」
「怒ってなんかないです」
三か月目に入って、社長は心配して様子を見に来たのであった。有難い。店が順調なことや、常連さんも出てきて皆に良くしてもらって地域になじめたことを伝えた。そして毎週火曜日に来店する絵を描いている青年の話をした。

「それで、待ってたわけね」。社長はニヤッと笑って「な〜ん、歳の差なんて四十五歳の彼氏が、ちょっと厳しいね、ハッ、ハッ、ハ」
「そんなじゃありません」
「いやいや顔に書いてある。でもさ、小木野さん見た目は推定二十九歳だから、いいのよ」
「自分でも良く分からないんです。孫みたいな歳の青年に何でこんなにときめくのだろう。うーん。若返った身体を手に入れて、気持ちにも変化が出たってことでしょうか？」
「それもあるだろうね。でもいくつになっても恋をしたり結婚したりする人もいるからね」
「私は、少なくとも六十九歳のままだったら恋をす

ることもなかっただろうし、このカフェもやっていなかったと思つたんです。今の生活で十分に満足していたし、冒険などしないで現状維持できれば良いと思つていた。でも想像もつかないことが起きて大変なことでもあったけど、今はとても幸せで、もし明日、元の身体に戻ったとしても、それはそれで幸せで、年齢なんて関係ない、今を生きていることに変わりがない、って思えるんです」
「そうだね全く同意。私も小木野さんと関わりを持って幸せだなぁって思ってますよ。その時、表からカイ君の声がした。
「スママセン、いいですか？」
「いらっしゃいませ」。私は元気に出迎えた。
「小木野さん。じゃあ私はこれで失礼するね。頑張つてね」
山本社長はカイ君に軽く会釈をして、私に親指を立て笑顔で出て行った。
カイ君は、私に絵を頼ってもらうのがモチベーションになって、急に創作意欲が高まり、この一週間で四枚の絵を描いたと笑っていた。そして、来週の水曜日に一緒に美術館に行くこと誘ってくれた。
翌週の水曜日、昼過ぎに美術館の入り口で待ち合わせをした。十月も下旬だといつのに、その日は二十五度以上の夏日だった。私は朝から何度も服を着替え、ようやくノースリーブに薄手のカーディガン、カーゴパンツに決めた。なにしろ若い女性が着るようなものはあまり持たせていないので雑誌を見ながら、なんとかこの組み合わせで落ち着いた。
カイ君はいつもと同じ白Tシャツにハーフパンツで時間通りに現れた。三十分ほどかけて展示作品を観て回り、美術館のレストランで食事をしたあと葉山の海岸を散歩した。海岸近くの公園のベンチに腰かけ恋人同士のように肩を寄せ合い海を見ていた。日も傾き十月らしい少しヒヤリした空気のなか、私は幸せを感じていた。
「僕、キコさんが好きだ」。カイ君は呟くように言った。
「ありがとう」
「ずっと一緒にいたい」
「それは無理」
「えっ？」
「なんでもない。私の小さな声は静かな波の音に吸い込まれていった。
「カイ君、古希って知ってる？」
「古希？ あの還暦とか喜寿とかの」
「そう。古希って七十歳のこと。私ね、来月誕生日が来ると古希なの」
「ん？ 何言ってるか良くわかんない」
「そっだよ。何言ってるか分かんないよね。話すと長くなるから今度ゆっくりね」
「あー！ 分かった。アハハ、ハ、ハ、それってコキコってこと？ 古希のキコ。僕が読み間違えたや」
「ホントだ！」
（まあいいや）と思いつつ二人で大笑いした。

「スママセン。いいですか？」と、遠慮がちに、細かい声で店に入ってきた。
「あ、どうぞ、お好きな席に」
彼は縁側に近い席に座り、壁一面の本棚を驚いたように見上げていた。
「いらっしゃいませ」
彼は私の顔を見て何故か安心したような優しい笑みを浮かべた。
「アイスコピーお願いします」
「ドキッ、イケメン。あービックリした」
子供、いや孫のような年齢の青年に不覚にもドキドキしてしまつた。彼は美術関係の本を数冊読んで一時間ほど帰った。会計の時にその繊細な手に青い鉛筆の握りかたが付いているのが見えた。よく見るとTシャツにも所々に鉛筆のシミがあった。きつと絵を描く人なのだろう。近くには県立近代美術館もあるのだから立ち寄る人も多い。
翌週の火曜日、スママセン。いいですか？」とまたあの青年が来店した。

「いらっしゃいませ」
「アイスコピーお願いします。あの、美術書が多いのでとても嬉しいです。毎週末もいいていいですか？」
「ええ、もちろん。どきどきする自分が情けない。あ、あ、絵を描いていらっしゃいますか？」
「僕、マリナーでアルバイトしながら絵を描いているんですけど、美術館に来た時に顔見知りの方にこのカフェの事を教えてもらつたんです。ホントに図書室みたいで、すいてですね」
（嬉しい！そんなにキラキラした目でみないで。そんな心の声を抑えよう。）
「私、図書室司書を長くやっていて、こんなカフェを開くのが夢だったんです」
「長〜、へ〜、凄いですね。本は事なら何でも分かりますよ。いろいろ教えてくださいな」
翌週の火曜日。またあの青年が来店した。

「スママセン。いいですか？」
「いらっしゃいませ。アイスコピーですね」
「はい、彼が嬉しそうに答えた。
この日は色々な本を見ては戻しを繰り返して何か探しているように見えた。
「すみません。教えてもらいたいんですが」
「はい。何かお探ですか？」
「画家のフランシス・ベーコンについて書いてある本ってありますか？」
「えーと、シル・ドゥルーズの『感覚の論理』ならあったと思います。美術書の所じゃなくて哲学書に分類したかも知れないわ、ちょっと待って。私のミスだ。急いで哲学書の中からそれを見つけて彼の手元に置いた。
「すごい、ありがとうございます」
私を見る彼の目がキラキラしている。
彼は帰りの会計の時に、壁に掲示してある【食品衛生責任者 小木野紀子】の表示を見て「ここのきこさん、」と呟いた。
私は思わず吹き出してしまった。

「連つわ、おぎのり。」と言います」
「あ、スママセン。僕の名前はイカワカイと言います。井戸の井に三本川、カイは絵画の絵と書きます」
「素敵な名前ですね」

「ええ、名前に引つ張られて絵が好きになったようなどころもあります。それとイカワカイって回文になっていて上から読んで下から読んでも同じなんです。だから回文みたいな言葉や名前にすぐ反応しちゃって、コキコさんだと回文の名前だなぁって思つて」
「ホントだ、初めて気が付いたわ」
「へ、へ、へ。彼は照れ笑いを浮かべ「これからキコさんと呼んでいいですか」
「もちろん、私もカイ君と呼んでいいかな」
「もちろんです。ヨロシクお願いします」
それから毎週火曜日にカイ君は来店した。

十月に入る頃には私達は旧知の友人のように絵や本について語り、閉店後に私が作った料理で食事をすることもあった。
「僕の夢は、いつか葉山美術館で個展を開くことなんだ。美術大学を出たからと言って誰もが画家として生活出来るなんて思っていないけど、僕は絶対に諦めない。でも一方では僕には才能がないのかも思れないと思うこともある。卒業して三年、大きな公募展には落選続き。だからこんな夢は誰にも言ったことがなかったけど、キコさん、今度、絵を頼ってもらえますか？」
「もちろん。楽しみにしてるわ」
翌週の火曜日、開店と同時に。
「スママセン、いいですか？」カイ君だ。急いで顔を出す「小木野さん。元気？」
山本社長だった。
「な〜んだ、社長。おはようございます」
「な〜んだ、はい、いいですよ。誰か待ってたの？」
「いいえ」
「なに、何怒ってんの」
「怒ってなんかないです」
三か月目に入って、社長は心配して様子を見に来たのであった。有難い。店が順調なことや、常連さんも出てきて皆に良くしてもらって地域になじめたことを伝えた。そして毎週火曜日に来店する絵を描いている青年の話をした。

「スママセン。いいですか？」と、遠慮がちに、細かい声で店に入ってきた。
「あ、どうぞ、お好きな席に」
彼は縁側に近い席に座り、壁一面の本棚を驚いたように見上げていた。
「いらっしゃいませ」
彼は私の顔を見て何故か安心したような優しい笑みを浮かべた。
「アイスコピーお願いします」
「ドキッ、イケメン。あービックリした」
子供、いや孫のような年齢の青年に不覚にもドキドキしてしまつた。彼は美術関係の本を数冊読んで一時間ほど帰った。会計の時にその繊細な手に青い鉛筆の握りかたが付いているのが見えた。よく見るとTシャツにも所々に鉛筆のシミがあった。きつと絵を描く人なのだろう。近くには県立近代美術館もあるのだから立ち寄る人も多い。
翌週の火曜日、スママセン。いいですか？」とまたあの青年が来店した。

「いらっしゃいませ」
「アイスコピーお願いします。あの、美術書が多いのでとても嬉しいです。毎週末もいいていいですか？」
「ええ、もちろん。どきどきする自分が情けない。あ、あ、絵を描いていらっしゃいますか？」
「僕、マリナーでアルバイトしながら絵を描いているんですけど、美術館に来た時に顔見知りの方にこのカフェの事を教えてもらつたんです。ホントに図書室みたいで、すいてですね」
（嬉しい！そんなにキラキラした目でみないで。そんな心の声を抑えよう。）
「私、図書室司書を長くやっていて、こんなカフェを開くのが夢だったんです」
「長〜、へ〜、凄いですね。本は事なら何でも分かりますよ。いろいろ教えてくださいな」
翌週の火曜日。またあの青年が来店した。

「スママセン。いいですか？」
「いらっしゃいませ。アイスコピーですね」
「はい、彼が嬉しそうに答えた。
この日は色々な本を見ては戻しを繰り返して何か探しているように見えた。
「すみません。教えてもらいたいんですが」
「はい。何かお探ですか？」
「画家のフランシス・ベーコンについて書いてある本ってありますか？」
「えーと、シル・ドゥルーズの『感覚の論理』ならあったと思います。美術書の所じゃなくて哲学書に分類したかも知れないわ、ちょっと待って。私のミスだ。急いで哲学書の中からそれを見つけて彼の手元に置いた。
「すごい、ありがとうございます」
私を見る彼の目がキラキラしている。
彼は帰りの会計の時に、壁に掲示してある【食品衛生責任者 小木野紀子】の表示を見て「ここのきこさん、」と呟いた。
私は思わず吹き出してしまった。

「連つわ、おぎのり。」と言います」
「あ、スママセン。僕の名前はイカワカイと言います。井戸の井に三本川、カイは絵画の絵と書きます」
「素敵な名前ですね」

「ええ、名前に引つ張られて絵が好きになったようなどころもあります。それとイカワカイって回文になっていて上から読んで下から読んでも同じなんです。だから回文みたいな言葉や名前にすぐ反応しちゃって、コキコさんだと回文の名前だなぁって思つて」
「ホントだ、初めて気が付いたわ」
「へ、へ、へ。彼は照れ笑いを浮かべ「これからキコさんと呼んでいいですか」
「もちろん、私もカイ君と呼んでいいかな」
「もちろんです。ヨロシクお願いします」
それから毎週火曜日にカイ君は来店した。

十月に入る頃には私達は旧知の友人のように絵や本について語り、閉店後に私が作った料理で食事をすることもあった。
「僕の夢は、いつか葉山美術館で個展を開くことなんだ。美術大学を出たからと言って誰もが画家として生活出来るなんて思っていないけど、僕は絶対に諦めない。でも一方では僕には才能がないのかも思れないと思うこともある。卒業して三年、大きな公募展には落選続き。だからこんな夢は誰にも言ったことがなかったけど、キコさん、今度、絵を頼ってもらえますか？」
「もちろん。楽しみにしてるわ」
翌週の火曜日、開店と同時に。
「スママセン、いいですか？」カイ君だ。急いで顔を出す「小木野さん。元気？」
山本社長だった。
「な〜んだ、社長。おはようございます」
「な〜んだ、はい、いいですよ。誰か待ってたの？」
「いいえ」
「なに、何怒ってんの」
「怒ってなんかないです」
三か月目に入って、社長は心配して様子を見に来たのであった。有難い。店が順調なことや、常連さんも出てきて皆に良くしてもらって地域になじめたことを伝えた。そして毎週火曜日に来店する絵を描いている青年の話をした。

「それで、待ってたわけね」。社長はニヤッと笑って「な〜ん、歳の差なんて四十五歳の彼氏が、ちょっと厳しいね、ハッ、ハッ、ハ」
「そんなじゃありません」
「いやいや顔に書いてある。でもさ、小木野さん見た目は推定二十九歳だから、いいのよ」
「自分でも良く分からないんです。孫みたいな歳の青年に何でこんなにときめくのだろう。うーん。若返った身体を手に入れて、気持ちにも変化が出たってことでしょうか？」
「それもあるだろうね。でもいくつになっても恋をしたり結婚したりする人もいるからね」
「私は、少なくとも六十九歳のままだったら恋をす

ることもなかっただろうし、このカフェもやっていなかったと思つたんです。今の生活で十分に満足していたし、冒険などしないで現状維持できれば良いと思つていた。でも想像もつかないことが起きて大変なことでもあったけど、今はとても幸せで、もし明日、元の身体に戻ったとしても、それはそれで幸せで、年齢なんて関係ない、今を生きていることに変わりがない、って思えるんです」
「そうだね全く同意。私も小木野さんと関わりを持って幸せだなぁって思ってますよ。その時、表からカイ君の声がした。
「スママセン、いいですか？」
「いらっしゃいませ」。私は元気に出迎えた。
「小木野さん。じゃあ私はこれで失礼するね。頑張つてね」
山本社長はカイ君に軽く会釈をして、私に親指を立て笑顔で出て行った。
カイ君は、私に絵を頼ってもらうのがモチベーションになって、急に創作意欲が高まり、この一週間で四枚の絵を描いたと笑っていた。そして、来週の水曜日に一緒に美術館に行くこと誘ってくれた。
翌週の水曜日、昼過ぎに美術館の入り口で待ち合わせをした。十月も下旬だといつのに、その日は二十五度以上の夏日だった。私は朝から何度も服を着替え、ようやくノースリーブに薄手のカーディガン、カーゴパンツに決めた。なにしろ若い女性が着るようなものはあまり持たせていないので雑誌を見ながら、なんとかこの組み合わせで落ち着いた。
カイ君はいつもと同じ白Tシャツにハーフパンツで時間通りに現れた。三十分ほどかけて展示作品を観て回り、美術館のレストランで食事をしたあと葉山の海岸を散歩した。海岸近くの公園のベンチに腰かけ恋人同士のように肩を寄せ合い海を見ていた。日も傾き十月らしい少しヒヤリした空気のなか、私は幸せを感じていた。
「僕、キコさんが好きだ」。カイ君は呟くように言った。
「ありがとう」
「ずっと一緒にいたい」
「それは無理」
「えっ？」
「なんでもない。私の小さな声は静かな波の音に吸い込まれていった。
「カイ君、古希って知ってる？」
「古希？ あの還暦とか喜寿とかの」
「そう。古希って七十歳のこと。私ね、来月誕生日が来ると古希なの」
「ん？ 何言ってるか良くわかんない」
「そっだよ。何言ってるか分かんないよね。話すと長くなるから今度ゆっくりね」
「あー！ 分かった。アハハ、ハ、ハ、それってコキコってこと？ 古希のキコ。僕が読み間違えたや」
「ホントだ！」
（まあいいや）と思いつつ二人で大笑いした。

「連つわ、おぎのり。」と言います」
「あ、スママセン。僕の名前はイカワカイと言います。井戸の井に三本川、カイは絵画の絵と書きます」
「素敵な名前ですね」

「ええ、名前に引つ張られて絵が好きになったようなどころもあります。それとイカワカイって回文になっていて上から読んで下から読んでも同じなんです。だから回文みたいな言葉や名前にすぐ反応しちゃって、コキコさんだと回文の名前だなぁって思つて」
「ホントだ、初めて気が付いたわ」
「へ、へ、へ。彼は照れ笑いを浮かべ「これからキコさんと呼んでいいですか」
「もちろん、私もカイ君と呼んでいいかな」
「もちろんです。ヨロシクお願いします」
それから毎週火曜日にカイ君は来店した。

十月に入る頃には私達は旧知の友人のように絵や本について語り、閉店後に私が作った料理で食事をすることもあった。
「僕の夢は、いつか葉山美術館で個展を開くことなんだ。美術大学を出たからと言って誰もが画家として生活出来るなんて思っていないけど、僕は絶対に諦めない。でも一方では僕には才能がないのかも思れないと思うこともある。卒業して三年、大きな公募展には落選続き。だからこんな夢は誰にも言ったことがなかったけど、キコさん、今度、絵を頼ってもらえますか？」
「もちろん。楽しみにしてるわ」
翌週の火曜日、開店と同時に。
「スママセン、いいですか？」カイ君だ。急いで顔を出す「小木野さん。元気？」
山本社長だった。
「な〜んだ、社長。おはようございます」
「な〜んだ、はい、いいですよ。誰か待ってたの？」
「いいえ」
「なに、何怒ってんの」
「怒ってなんかないです」
三か月目に入って、社長は心配して様子を見に来たのであった。有難い。店が順調なことや、常連さんも出てきて皆に良くしてもらって地域になじめたことを伝えた。そして毎週火曜日に来店する絵を描いている青年の話をした。

「スママセン。いいですか？」と、遠慮がちに、細かい声で店に入ってきた。
「あ、どうぞ、お好きな席に」
彼は縁側に近い席に座り、壁一面の本棚を驚いたように見上げていた。
「いらっしゃいませ」
彼は私の顔を見て何故か安心したような優しい笑みを浮かべた。
「アイスコピーお願いします」
「ドキッ、イケメン。あービックリした」
子供、いや孫のような年齢の青年に不覚にもドキドキしてしまつた。彼は美術関係の本を数冊読んで一時間ほど帰った。会計の時にその繊細な手に青い鉛筆の握りかたが付いているのが見えた。よく見るとTシャツにも所々に鉛筆のシミがあった。きつと絵を描く人なのだろう。近くには県立近代美術館もあるのだから立ち寄る人も多い。
翌週の火曜日、スママセン。いいですか？」とまたあの青年が来店した。

「いらっしゃいませ」
「アイスコピーお願いします。あの、美術書が多いのでとても嬉しいです。毎週末もいいていいですか？」
「ええ、もちろん。どきどきする自分が情けない。あ、あ、絵を描いていらっしゃいますか？」
「僕、マリナーでアルバイトしながら絵を描いているんですけど、美術館に来た時に顔見知りの方にこのカフェの事を教えてもらつたんです。ホントに図書室みたいで、すいてですね」
（嬉しい！そんなにキラキラした目でみないで。そんな心の声を抑えよう。）
「私、図書室司書を長くやっていて、こんなカフェを開くのが夢だったんです」
「長〜、へ〜、凄いですね。本は事なら何でも分かりますよ。いろいろ教えてくださいな」
翌週の火曜日。またあの青年が来店した。

「スママセン。いいですか？」
「いらっしゃいませ。アイスコピーですね」
「はい、彼が嬉しそうに答えた。
この日は色々な本を見ては戻しを繰り返して何か探しているように見えた。
「すみません。教えてもらいたいんですが」
「はい。何かお探ですか？」
「画家のフランシス・ベーコンについて書いてある本ってありますか？」
「えーと、シル・ドゥルーズの『感覚の論理』ならあったと思います。美術書の所じゃなくて哲学書に分類したかも知れないわ、ちょっと待って。私のミスだ。急いで哲学書の中からそれを見つけて彼の手元に置いた。
「すごい、ありがとうございます」
私を見る彼の目がキラキラしている。
彼は帰りの会計の時に、壁に掲示してある【食品衛生責任者 小木野紀子】の表示を見て「ここのきこさん、」と呟いた。
私は思わず吹き出してしまった。

「連つわ、おぎのり。」と言います」
「あ、スママセン。僕の名前はイカワカイと言います。井戸の井に三本川、カイは絵画の絵と書きます」
「素敵な名前ですね」

「ええ、名前に引つ張られて絵が好きになったようなどころもあります。それとイカワカイって回文になっていて上から読んで下から読んでも同じなんです。だから回文みたいな言葉や名前にすぐ反応しちゃって、コキコさんだと回文の名前だなぁって思つて」
「ホントだ、初めて気が付いたわ」
「へ、へ、へ。彼は照れ笑いを浮かべ「これからキコさんと呼んでいいですか」
「もちろん、私もカイ君と呼んでいいかな」
「もちろんです。ヨロシクお願いします」
それから毎週火曜日にカイ君は来店した。

十月に入る頃には私達は旧知の友人のように絵や本について語り、閉店後に私が作った料理で食事をすることもあった。
「僕の夢は、いつか葉山美術館で個展を開くことなんだ。美術大学を出たからと言って誰もが画家として生活出来るなんて思っていないけど、僕は絶対に諦めない。でも一方では僕には才能がないのかも思れないと思うこともある。卒業して三年、大きな公募展には落選続き。だからこんな夢は誰にも言ったことがなかったけど、キコさん、今度、絵を頼ってもらえますか？」
「もちろん。楽しみにしてるわ」
翌週の火曜日、開店と同時に。
「スママセン、いいですか？」カイ君だ。急いで顔を出す「小木野さん。元気？」
山本社長だった。
「な〜んだ、社長。おはようございます」
「な〜んだ、はい、いいですよ。誰か待ってたの？」
「いいえ」
「なに、何怒ってんの」
「怒ってなんかないです」
三か月目に入って、社長は心配して様子を見に来たのであった。有難い。店が順調なことや、常連さんも出てきて皆に良くしてもらって地域になじめたことを伝えた。そして毎週火曜日に来店する絵を描いている青年の話をした。

「それで、待ってたわけね」。社長はニヤッと笑って「な〜ん、歳の差なんて四十五歳の彼氏が、ちょっと厳しいね、ハッ、ハッ、ハ」
「そんなじゃありません」
「いやいや顔に書いてある。でもさ、小木野さん見た目は推定二十九歳だから、いいのよ」
「自分でも良く分からないんです。孫みたいな歳の青年に何でこんなにときめくのだろう。うーん。若返った身体を手に入れて、気持ちにも変化が出たってことでしょうか？」
「それもあるだろうね。でもいくつになっても恋をしたり結婚したりする人もいるからね」
「私は、少なくとも六十九歳のままだったら恋をす

ることもなかっただろうし、このカフェもやっていなかったと思つたんです。今の生活で十分に満足していたし、冒険などしないで現状維持できれば良いと思つていた。でも想像もつかないことが起きて大変なことでもあったけど、今はとても幸せで、もし明日、元の身体に戻ったとしても、それはそれで幸せで、年齢なんて関係ない、今を生きていることに変わりがない、って思えるんです」
「そうだね全く同意。私も小木野さんと関わりを持って幸せだなぁって思ってますよ。その時、表からカイ君の声がした。
「スママセン、いいですか？」
「いらっしゃいませ」。私は元気に出迎えた。
「小木野さん。じゃあ私はこれで失礼するね。頑張つてね」
山本社長はカイ君に軽く会釈をして、私に親指を立て笑顔で出て行った。
カイ君は、私に絵を頼ってもらうのがモチベーションになって、急に創作意欲が高まり、この一週間で四枚の絵を描いたと笑っていた。そして、来週の水曜日に一緒に美術館に行くこと誘ってくれた。
翌週の水曜日、昼過ぎに美術館の入り口で待ち合わせをした。十月も下旬だといつのに、その日は二十五度以上の夏日だった。私は朝から何度も服を着替え、ようやくノースリーブに薄手のカーディガン、カーゴパンツに決めた。なにしろ若い女性が着るようなものはあまり持たせていないので雑誌を見ながら、なんとかこの組み合わせで落ち着いた。
カイ君はいつもと同じ白Tシャツにハーフパンツで時間通りに現れた。三十分ほどかけて展示作品を観て回り、美術館のレストランで食事をしたあと葉山の海岸を散歩した。海岸近くの公園のベンチに腰かけ恋人同士のように肩を寄せ合い海を見ていた。日も傾き十月らしい少しヒヤリした空気のなか、私は幸せを感じていた。
「僕、キコさんが好きだ」。カイ君は呟くように言った。
「ありがとう」
「ずっと一緒にいたい」
「それは無理」
「えっ？」
「なんでもない。私の小さな声は静かな波の音に吸い込まれていった。
「カイ君、古希って知ってる？」
「古希？ あの還暦とか喜寿とかの」
「そう。古希って七十歳のこと。私ね、来月誕生日が来ると古希なの」
「ん？ 何言ってるか良くわかんない」
「そっだよ。何言ってるか分かんないよね。話すと長くなるから今度ゆっくりね」
「あー！ 分かった。アハハ、ハ、ハ、それってコキコってこと？ 古希のキコ。僕が読み間違えたや」
「ホントだ！」
（まあいいや）と思いつつ二人で大笑いした。

「連つわ、おぎのり。」と言います」
「あ、スママセン。僕の名前はイカワカイと言います。井戸の井に三本川、カイは絵画の絵と書きます」
「素敵な名前ですね」

「ええ、名前に引つ張られて絵が好きになったようなどころもあります。それとイカワカイって回文になっていて上から読んで下から読んでも同じなんです。だから回文みたいな言葉や名前にすぐ反応しちゃって、コキコさんだと回文の名前だなぁって思つて」
「ホントだ、初めて気が付いたわ」
「へ、へ、へ。彼は照れ笑いを浮かべ「これからキコさんと呼んでいいですか」
「もちろん、私もカイ君と呼んでいいかな」
「もちろんです。ヨロシクお願いします」
それから毎週火曜日にカイ君は来店した。

十月に入る頃には私達は旧知の友人のように絵や本について語り、閉店後に私が作った料理で食事をすることもあった。
「僕の夢は、いつか葉山美術館で個展を開くことなんだ。美術大学を出たからと言って誰もが画家として生活出来るなんて思っていないけど、僕は絶対に諦めない。でも一方では僕には才能がないのかも思れないと思うこともある。卒業して三年、大きな公募展には落選続き。だからこんな夢は誰にも言ったことがなかったけど、キコさん、今度、絵を頼ってもらえますか？」
「もちろん。楽しみにしてるわ」
翌週の火曜日、開店と同時に。
「スママセン、いいですか？」カイ君だ。急いで顔を出す「小木野さん。元気？」
山本社長だった。
「な〜んだ、社長。おはようございます」
「な〜んだ、はい、いいですよ。誰か待ってたの？」
「いいえ」
「なに、何怒ってんの」
「怒ってなんかないです」
三か月目に入って、社長は心配して様子を見に来たのであった。有難い。店が順調なことや、常連さんも出てきて皆に良くしてもらって地域になじめたことを伝えた。そして毎週火曜日に来店する絵を描いている青年の話をした。

そして静かな波の音が千守歌のように聞こえな
か、私はカイ君の肩にもたれ、この時間がいつまでも続くようにと願いながら眠りに落ちていった。

「アッ、姉ちゃん、姉ちゃん、気が付いた？ 誰か、早く看護師さん呼んで」
遠くで弟の声が聞こえた。周りでバタバタと騒がしい気がする。
（良かった。もう大丈夫、先生呼びますね）
そんな声が聞こえて目が覚めた。
「あー良かった。姉ちゃん分かる？」
弟の顔と白い天井が目に入る。

私は鎌倉駅で意識を失ってから一週間も眠り続けていたらしい。
（まさか夢だったなんて……）
その後わずか一週間で私は退院し元の生活に戻っていた。まず最初に、スポーツセンターの体操教室に復帰し姉さんとランチをした。次に、古希同窓会の返信ハガキの「出席します」に丸をして投函した。そして、夢を実現するために古民家カフェの開業に向かって具体的な計画を立て始めた。
秋風が吹くころには候補物件を探し始めた。もちろん、葉山に。
いくつか、物件を見た後、美術館に立ち寄った。入り口のチケット売り場で六十五歳以上の証明を提示するため、バッグの中を覗いているとき、美術館から出てきた青年が爽やかな風と共に横を通り過ぎて行った。
（えっ……）
振り返ると、ロンクヘアを後ろに束ねた、白いTシャツ、ハーフパンツにビーチサンダル姿の青年だった。
その右手首あたりには青い絵の具が付いているのが見えた。

「アッ、姉ちゃん、姉ちゃん、気が付いた？ 誰か、早く看護師さん呼んで」
遠くで弟の声が聞こえた。周りでバタバタと騒がしい気がする。
（良かった。もう大丈夫、先生呼びますね）
そんな声が聞こえて目が覚めた。
「あー良かった。姉ちゃん分かる？」
弟の顔と白い天井が目に入る。

私は鎌倉駅で意識を失ってから一週間も眠り続けていたらしい。
（まさか夢だったなんて……）
その後わずか一週間で私は退院し元の生活に戻っていた。まず最初に、スポーツセンターの体操教室に復帰し姉さんとランチをした。次に、古希同窓会の返信ハガキの「出席します」に丸をして投函した。そして、夢を実現するために古民家カフェの開業に向かって具体的な計画を立て始めた。
秋風が吹くころには候補物件を探し始めた。もちろん、葉山に。
いくつか、物件を見た後、美術館に立ち寄った。入り口のチケット売り場で六十五歳以上の証明を提示するため、バッグの中を覗いているとき、美術館から出てきた青年が爽やかな風と共に横を通り過ぎて行った。
（えっ……）
振り返ると、ロンクヘアを後ろに束ねた、白いTシャツ、ハーフパンツにビーチサンダル姿の青年だった。
その右手首あたりには青い絵の具が付いているのが見えた。

「アッ、姉ちゃん、姉ちゃん、気が付いた？ 誰か、早く看護師さん呼んで」
遠くで弟の声が聞こえた。周りでバタバタと騒がしい気がする。
（良かった。もう大丈夫、先生呼びますね）
そんな声が聞こえて目が覚めた。
「あー良かった。姉ちゃん分かる？」
弟の顔と白い天井が目に入る。